

創立100周年記念 知の大冒険—東洋文庫名品の煌めき—

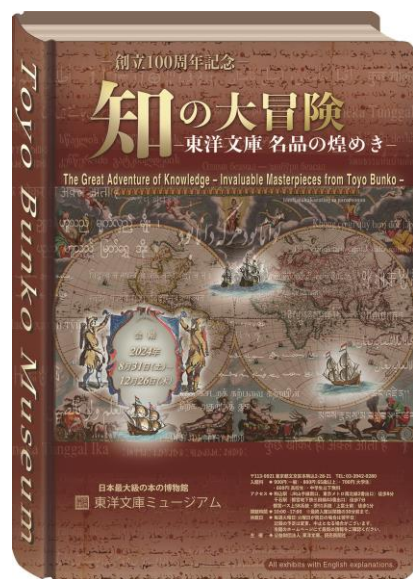
会期：2024年8月31日（土）～12月26日（木）
会場：東洋文庫ミュージアム
主催：公益財団法人東洋文庫、読売新聞社

東洋文庫は100年前に設立された際、書物の収集や研究のみならず、普及の使命を掲げていました。この使命を追求し、2011年のミュージアム開館以来、東洋学にまつわる多様なテーマで38回にわたる企画展を開催してきました。

創立100周年を記念した本展は、時空を超えたアジア世界の面白さと豊かさを、あらためて体験していただく「知の大冒険」がテーマです。

蔵書を通じてアジアの多様な人々、言語、衣食、歴史、宗教、自然との出会いを、旅をするように体験なさってください。ご覧いただく資料の多くは、災害や戦争などの危機的状況を乗り越えてきたものです。こうした経緯を知ることによって、おなじみの資料も、きっと見え方が変わることでしょう。

さあ、新たな「知」との出会いが待つ、アジア世界への冒険を、すみずみまでご堪能下さい。



メインビジュアル

展示構成とみどころ

1、東洋文庫について—知識を継承する

文化財は経年劣化や自然災害、戦乱などで容易に失われます。東洋文庫が所蔵する書籍や地図、絵画などは、数々の危機を乗り越えてきたものです。「モリソン文庫」は19世紀末から20世紀前半にかけて収集され、義和団事件や東京湾岸の高潮などの困難を乗り越えました。第二次世界大戦中には、研究員の尽力により蔵書が宮城県に疎開され、地元の人々が見守りました。こうして守られてきた書物は、私たちに長い時の流れと広大な世界をみせてくれます。知の大冒険へ漕ぎ出す前に、文化財を守るために奮闘してきた人々の記録を見ていくことで、東洋文庫の草創期を紹介いたします。



I. 創立当時の東洋文庫外観



II. 文庫開設に向けて準備中の人々

III. 製本道具 20世紀初頃

岩崎久彌が購入した当時のモリソン文庫には、未製本の状態の洋書が多く含まれていました。そこで久彌は、製本道具を揃えてコレクションの整備を指示しました。木槌や「コツ」という木製定規などの、現在も東洋文庫に残る道具には、岩崎家の家紋「重ね三階菱」が刻まれています。



2、東洋の文字、言葉…『甲骨卜辞片』、『コーラン』など

ここから冒険が始まります。東洋世界へ漕ぎ出しましょう。ただし、「東洋」は本来海域を指す言葉ですが、現在は陸域の人間社会や文化を指します。アジアと言った方が分かりやすいでしょうか。これからアジアの人々の記憶や物語を探しに行きます。アジアも東方を意味し、西洋から見た東の世界を指します。その位置は時代や視点によって異なります。まずは西洋人が作った地図をガイドにし、アジアの広大な領域を見渡しましょう。しかし地図には描かれていないもの、例えば土地の正確な形や多様で魅力的な文化の姿も多くあります。この章では、東洋の象徴として「文字」を取り上げます。紀元前から今日まで東洋で生み出されてきた数々の文字に触れていきましょう。

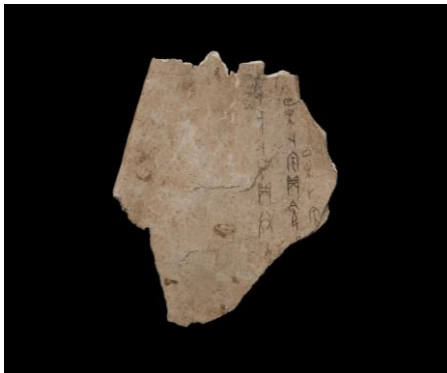
【主な展示資料】『説文解字』『クルアーン（コーラン）』『訓民正音』など

IV. 『甲骨卜辞片』

紀元前14～紀元前11世紀頃 中国河南省安陽市出土

考古学上で確認できる中国最古の王朝「殷」（紀元前17～紀元前11世紀）の時代に、主に占いに用いられた動物の骨や亀の腹甲を「甲骨」といいます。ここに刻まれた「甲骨文字」は、漢字の最も古い形態であるとされています。

甲骨文字の研究は、殷王朝の都であった殷墟（現在の河南省安陽市）の発掘が始まる20世紀前半から本格的に行われるようになりますが、出土した甲骨に刻まれた文字の多くはまだ解読できていません。東洋文庫は大小614片の甲骨を所蔵しています。これらは、日本の甲骨文字研究の先駆者である林泰輔が、1918年に河南省での実地調査で収集したものです。



V. 『ヒエログリフ辞典』

ウォーリス・バッジ 1920年 ロンドン刊

イギリスの考古学者バッジの著作です。ヒエログリフとは古代エジプトで使われていた神聖文字です。フランスの学者シャンポリオンが、1822年にロゼッタストーン（エジプトで発見された石碑）に刻まれたヒエログリフの解読に成功し、読むことが可能となりました。本書の著者は古代エジプト、アッシリアの研究者として知られています。大英博物館の責任者を長くつとめ、同館の古代エジプトコレクションの形成に深く関わりました。



3、東洋の旅

「文字」の次は、テキストと図版を通じて東洋の多彩な魅力を楽しみましょう。日本を出帆、進路は西へ。中国、朝鮮、東南アジア、インド、西アジアの文化や風土を、百科事典、歴史書、地理書、探検記が案内してくれます。東洋世界は、貿易風と潮流によって多様な文物が行き交う“知の海”でした。書物が主要な情報源だった時代を想像してみてください。古の航海者が星を目印にしたように、他地域の情報は東洋の人々が自分たちの位置を知る指標でした。書き記された書物や口承も重要な知の伝達手段でした。スマートフォンで世界の情報に常時アクセスできる現代と比べるのも、この旅の楽しみ方です。孔子、万里の長城、ガンダーラ、オスマン帝国など、気になる言葉に出会ったら立ち寄ってみましょう。本を立ち読みする感覚で、寄港地観光を楽しむ章が始まります。

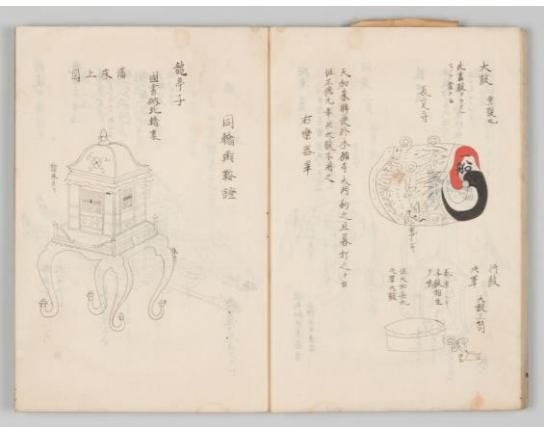
【主な展示資料】『史記』『山海経広注』『蘭亭序』『高麗史』『アジアの鳥類』『ガンダーラの仏教寺院』など

VI. 『永楽大典』

解縉ほか編 1408年（明代） 1562年書写

明の第三代皇帝、永楽帝（在位1402-24）の命でまとめられた、本文22877巻・目録60巻からなる中国史上最大級の百科事典です。文字それぞれの発音、意味、書体、その字を使う単語、関連する文献などを掲載しています。本書を作るにあたり、中国に伝わる膨大な数の文献を集め分類する作業が、永楽帝の即位後すぐに始まりました。正本は明末期の戦乱により焼失しましたが、副本は一部残存しており、このうち東洋文庫は63巻34冊を所蔵しています。





VII. 『朝鮮聘事』

1711（正徳元）年刊 1802（享和2）年書写

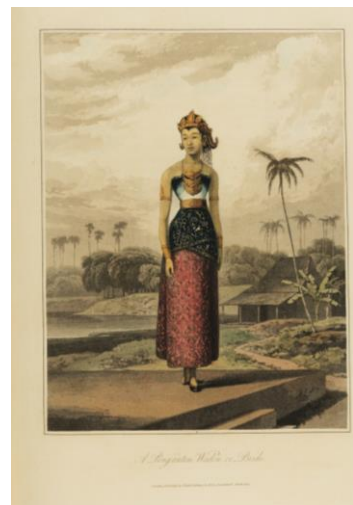
1711（正徳元）年に来朝した朝鮮通信使に関する記録です。室町時代から日本と朝鮮は使節団を派遣しあっていましたが、15世紀後半からしばらく途絶え、豊臣秀吉による文禄・慶長の役によって国交断絶となったために中断されました。しかし、江戸時代に日本から朝鮮に通信使を打診したことで再開されました。本書には、通信使の名簿や船の大きさが記されているほか、通信使持参の道具や楽隊の楽器などが絵入りで記されています。

VIII. 『ジャワ誌』

トーマス・ラッフルズ 1817年 ロンドン刊

著者のラッフルズ（1781-1826）は貿易都市シンガポールの建設者として知られています。しかしイギリスがシンガポールを統治する以前に、ラッフルズがイギリス東インド会社の職員として派遣されたのは、インドネシアのジャワ島でした。31歳のときに同地を統治するための準知事に任命されました。在任期間中、彼は啓蒙思想的観点からジャワの前近代的統治に対して様々な改革を加えました。また、ポロブドゥール遺跡の発掘などに携わり、学術・文化面においても大きな功績を残しています。本書は、当時ラッフルズが現地で行った調査を元に記されました。

帰国直後の1817年に刊行された本書は、ジャワの風土、歴史、文化を知るための貴重な文献として高い評価を受け、ラッフルズはナイトの称号を授与されました。



IX. 『高地アジア科学調査』

ヘルマン、ロベルト編 1861-66年 ライプチヒ刊

ヘルマン、アドルフ、ロベルトのシュラーギントワイト3兄弟が、イギリス東インド会社から要請を受け、インドのデカン高原、ヒマラヤの山岳地帯、崑崙山脈などを調査した記録です。風景のスケッチ、地図の他、気象報告なども含まれています。スケッチにも描かれている「Sasser峠」をはじめとするこのあたりの峠は標高5000mを超すところが多く、表題通りの高地を調査しているのがわかります。

4. 西洋と東洋 交わる世界

見知らぬ世界への旅はいつの時代も新鮮な驚きをもたらします。15世紀半ばの大航海時代の幕開けで東西の航路が開かれ、両者の交わりが増えました。本章では、東洋への誘いに大きく寄与したマルコ・ポーロの『東方見聞録』を紹介します。この書は多くの言語に翻訳・出版され、多くの人々に愛読されました。東洋へ向かったのは商人だけでなく、16世紀後半以降は宣教師、使節団、その随行員、軍人、地理・天文学の研究者などが様々な目的で東洋を訪れ、多くの書を残しました。これらの書物には、東洋各地の姿が詳細に記されています。マリー・アントワネットやエカチェリーナ2世もこれらを読み、ナポレオンは漢字辞典の編纂を指示しました。本章では、西洋人が東洋を訪れた際の見聞や体験を記した書物を通じて、東西世界の交わりを探っていきます。

【主な展示資料】『大地図帳』『ロビンソン・クルーソー』『イエズス会士書簡集』『世界周航画集』など



X.『東方見聞録』

マルコ・ポーロ口述、ルスティケツロ著

1671年 アムステルダム刊

『東方見聞録』はヴェネツィアの商人マルコ・ポーロが、父や叔父と東方を旅した際に見聞きしたこと、体験したことがまとめられた旅行記です。当初は手書き本(写本)で広まりましたが、15世紀後半にヨーロッパで活版印刷技術が発明されると、各国で様々な言語の印刷本が出されました。

東洋文庫には年代がわかるものだけでも、出版年・出版地・言語が異なる『東方見聞録』が約80種類あり、刊本のコレクションとしては世界最大です。本書は多くの人々の憧れを刺激し、大航海時代の幕開けに大きな影響を与えました。東西の出会いを生んだ歴史的な一冊といえます。



XI.『マカートニーを謁見する乾隆帝』

ジェームズ・ギルレイ 1792年 ロンドン刊

18世紀後半、イギリスは清に対して貿易の条件を交渉するべく、使節を派遣しました。使節団の全権大使に選ばれたのは、上院議員のジョージ・マカートニー伯爵でした。1793年、熱河の離宮で使節団を迎えた乾隆帝を筆頭とする清側は、マカートニーたちに対し、周辺の朝貢使節と同様に「三跪九叩頭の礼(皇帝に対面する直前に三回跪き、九回頭を床に擦りつける儀礼)」を行うように求めました。マカートニーはこれを拒否し、片膝をつくイギリス式の挨拶を提案しました。結果、乾隆帝は三跪九叩頭なしでの謁見を許可しましたが、制限貿易の撤廃をはじめとするイギリス側の要望は、すべて拒否したといえます。図版の銅版画はイギリスの風刺画家が想像で描いたとされています。



XII.『ナポレオン辞典』

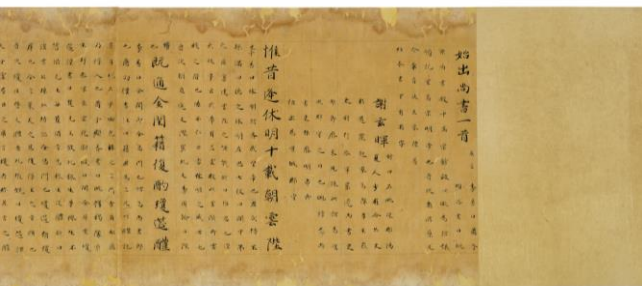
ジョゼフ・ドゥ・ギーニュ編 1819年 パリ刊

ナポレオン1世は、1808年にカトリックの中国伝道に必要な中国語辞典の編纂を、本書編者のドゥ・ギーニュ(1759-1845)に命じました。彼は17年にわたり広東のフランス領事を務めた人物で、フルモン(1683-1745)の『中羅辞典』(1726年)の写本を参考にして新たな辞典を作りました。ギーニュの辞典は部首と総画数から漢字を探せるようにしたので、発音がわからなくても漢字の形から辞書を引くことができる点が画期的でした。本辞典に収録された1万4000の漢字の中には、普段使わないような珍しいものもあります。例えば、中国の漢字では最多画数といわれる「龍」を4つ書く漢字(読み方は「テツ」)まで網羅されています。ちなみにその意味は、「口数が多い、おしゃべり」です。

5. 世界の中の日本

東洋と世界を巡る旅はいよいよ日本に帰ってきます。日本の歴史もまた、見知らぬ人、そしてそれまでの考えや暮らしを一変させるものとの出会いの物語だと言えるでしょう。『魏志倭人伝』は日本に関する最も古い資料の一つです。その後、日本は仏教、儒教、漢字の影響を受けて文化を育んできました。16世紀以降、西洋の宣教師たちがキリスト教を伝え、西洋の学問が新たな医学書や地図として日本にもたらされ、日本人に驚きを与えました。一方、ケンペルやシーボルトが伝えた日本の姿は西洋人の注目を集めました。19世紀にはアヘン戦争で中国が敗北し、日本は新しい世界に直面しました。イギリス艦隊による中国船隊の破壊は、日本にとって中国中心の世界の崩壊を意味しました。日本の周囲の世界の記録を紐解き、日本がどのように誕生し変化していったか、その道のりを辿りましょう。

【主な展示資料】国宝『毛詩』重要文化財『論語集解』『解体新書』『改選江戸大絵図』『アヘン戦争図』など



XIII. 国宝『文選集注』

10-12世紀（平安時代）書写

『文選』とは、6世紀前半の中国の王朝「梁」の皇太子蕭統（昭明太子、501-531）が編纂した詩文集です。梁より以前のおよそ千年間に生まれた文学作品の中から、約800篇の優れた作品を選んで収録しています。日本に伝来したのは7世紀頃と考えられ、その後、長きにわたって知識人の教養書として広く読まれました。

東洋文庫が所蔵する本巻は、『文選』の代表的な注釈を集めて再編集したもので『文選集注』とよばれます。平安時代の日本で書写されたもので、中国では失われてしまった注が記されている点、注を選んだ日本人の解釈も加えられている点が特に貴重とされます。『文選集注』は全120巻あったとされますが、現在残るのは24巻分のみです。このうち、東洋文庫は48、59（上下）、69、88、113（上下）の5巻7軸を所蔵しています。



XIV. 『錦織歌麿形新模様うちかけ』

喜多川歌麿 1797（寛政9）年頃

うちかけを着た吉原の花魁（最高位の遊女）を描いています。墨の線で輪郭をとることを控えめにして、色使いと襟元などに施した空摺り（紙に凹凸をつける方法）の工夫で立体感を表現しています。本図は7点ほど現存が確認されています。それらと比較すると、東洋文庫所蔵品は色使いが異なることから、初版ではなく第2版であろうと考えられます。しかし、従来この作品に用いられた「白うちかけ」という題は、その他の違例は全てうちかけの色が白く退色していたために付けられたもので、本来は薄紅色であったことを本作は伝えています。



XV. 『諸国瀧廻り』

葛飾北斎 1832-33（天保3-4）年頃

全国八カ所の名瀑を描いた葛飾北斎（1760-1849）の名所絵シリーズです。生きているかのように変化する水の造形、水と共に生活を営む人々の豊かな表情、単調にならない構図とデザイン性、そして濃淡・明暗の変化に富んだ巧みな色使い。各図に北斎の感性が凝縮されている名所絵の代表作です。ひときわ目をひく鮮やかな青色には「プルシャン・ブルー」という西洋から渡来した顔料を使用しています。非常に発色が良いため流行し、当時は主に浮世絵の風景図で用いられました。

会期中のイベント

<ミュージアム講演会>

※参加費無料（入館料が別途かかります）

10月5日（土）14：00～15：30 「東洋文庫の逸品と近代中国史」

講師：岡本隆司（早稲田大学教授、東洋文庫研究員）

10月19日（土）14：00～15：30 「異域を記述する一書物の東西交渉」

講師：高田時雄（京都大学名誉教授、東洋文庫図書部長）

※その他イベント多数実施予定

広報用画像のお申し込みについて

<画像使用全般に関してのご注意>

- 本展広報目的での使用に限ります（会期終了まで）。使用後はデータの廃棄をお願いいたします。
- 企画展名、会期、会場、画像・クレジット（所蔵先）は必ず記載してください。
- 転載、再放送など、二次使用される場合は別途申請をお願いいたします。
- Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードを施し、「画像の無断転載を禁じます」旨を表記してください。
- 基本情報、画像使用などの確認のため、ゲラ刷り・原稿段階のものを担当者にお送りください。
- 掲載・放送後は必ず掲載紙（誌）、同録DVDを担当者までお送りください。

<広報画像クレジット一覧>

（1点のみ掲載の場合）公益財団法人東洋文庫蔵

（2点以上掲載する場合）すべて公益財団法人東洋文庫蔵 を必ずご記載ください。

<広報用画像一覧>※画像は本文をご覧ください

番号	クレジット
<input type="checkbox"/> I	創立当時の東洋文庫外観
<input type="checkbox"/> II	文庫開設に向けて準備中の人々
<input type="checkbox"/> III	製本道具
<input type="checkbox"/> IV	『甲骨卜辞片』紀元前14～紀元前11世紀頃 中国河南省安陽市出土
<input type="checkbox"/> V	『ヒエログリフ辞典』ウォーリス・バッジ 1920年 ロンドン刊
<input type="checkbox"/> VI	『永楽大典』解縉ほか編 1408年（明代） 1562年書写
<input type="checkbox"/> VII	『朝鮮聘事』1711（正徳元）年刊 1802（享和2）年書写
<input type="checkbox"/> VIII	『ジャワ誌』トーマス・ラッフルズ 1817年 ロンドン刊
<input type="checkbox"/> IX	『高地アジア科学調査』ヘルマン、ロベルト編 1861-66年 ライプチヒ刊
<input type="checkbox"/> X	『東方見聞録』マルコ・ポーロ口述、ルスティケッロ著 1671年 アムステルダム刊
<input type="checkbox"/> XI	『マカートニーを謁見する乾隆帝』ジェームズ・ギルレイ 1792年 ロンドン刊
<input type="checkbox"/> XII	『ナポレオン辞典』ジョゼフ・ドゥ・ギーニュ編 1819年 パリ刊
<input type="checkbox"/> XIII	国宝『文選集注』10-12世紀（平安時代）書写
<input type="checkbox"/> XIV	『錦織歌麿形新模様うちかけ』喜多川歌麿 1797（寛政9）年頃
<input type="checkbox"/> XV	『諸国瀧廻り』葛飾北斎 1832-33（天保3-4）年頃
<input type="checkbox"/>	メインビジュアル

上記資料画像を広報素材として提供いたします。

下記のURL、またはQRコードよりお申し込みください。

URL：<https://docs.google.com/forms/d/15wih7PCYTM9Z8Zw4WjZZr5iVmuwAZ8eT3dqaYP7mi68/edit>

QRコード



(TEL) 03-3942-0328 (E-mail)shinoki@toyo-bunko.or.jp 担当者：普及展示部 篠木